



卓 話



「ラオスの図書プロジェクトについて」

NPOラオスの子供

チャンタソン・インタヴォン氏

私はラオスがまだ王政体制であった頃、日本の文部省による奨学生として参りましたが、留学している間の1974年、ラオスに革命が起り、ラオスが社会主義国となったため、帰国しにくくなってしまいました。いつかは帰れるだろうと考えている内に、日本の男性と結婚し、日本で暮らすことになりました。



しかし中学生の時から自国に役立ちたいと考えていたので、日本でぬくぬくと幸せに暮らしていることに少なからず罪悪感を持っていました。ですのでラオスにいる人々が苦労している中、自分に何が出来るだろうと常に考えていたのです。

そうした中、娘が2才となり、日本の母親がしているように絵本を読んであげると、娘が本に大変興味を示しました。私はなんと素晴らしいことかと感動したのです。私自身、幼少の頃絵本を読んでもらった経験がありません。ラオスには絵本がないため、一般のラオス人の子供は絵本にふれる機会が殆どないのです。

こうした自分の育児経験と幼少体験がきっかけとなり、子供達に絵本を送る会をつくりました。絵ばかりの本でしたので訳す必要はないと考え、最初は日本の古い絵本をただ送るだけでした。しかしラオスの幼稚園を訪ねた時に、どんなに小さい文字でも「なんて書いてあるの?」と聞かれ大変驚いたのです。どんな子供でも本を読んで欲しいことを実感し、やはりラオス語に訳す必要があると思いました。

その頃、大学院に通っていたのですが、いくつかの奨学金の募集に応募したところ、二つの機関からお返事を頂きました。迷った末に、ただ奨学金を受けるだけの機関よりも、1ヶ月に1度顔を出すことが必要とされる、つまり自分の家族以外と接触する機会が増えるロータリークラブの方を選んだのです。ロータリーに入り、皆さんと共に色々な奉仕活動を考え、経験させて頂き、自分の奉仕活動に対する考えも変わっていきました。

そうしている内に、子供達にもっと本を送りたい、子供達に文字を定着させたいという願いをさらに強く持つよう

になりました。一般のラオスの学校には教科書しかないのですが、それでは子供達は本を読みたがりません。

しかし本をどのように扱ったらいいか、先生達も分からないということが分かってきました。視察に行った時、貸し出しもしないで、なくなったらいけないと棚に鍵をかけ、本がシロアリに食われていたという状態でした。そこで本を与える前に先生達を集めて、本をどのように扱ったらいいのかを教育することから始めました。なくなってもいいから本をもっと読ませて欲しい、貸し出して欲しいと頼んだのです。

ラオスの先生の給料は20ドル位で、これは一週間分の生活費にしかありません。先生は他の仕事を持って生活費を賄わねばならず、その為先生方の自由時間に図書館を開けてくれとお願いしても難しいのです。せめて昼休み、20分休みの間だけでもいいから開架して欲しいと頼み、とりえず子供達に読ませようと努力しました。そうすると中には大変熱心な先生もおり、放課後や土、日も開けてくれる所もでてきました。こうして少しずつですが変わっていったのです。

しかし、交通手段がまだまだ不便な中、二袋20kgもある本を取りに来てもらう為には、先生達に図書室の必要性をもっと実感してもらわなくてはならないと、子供が本を読むことによって字が読めるようになる、勉強が出来るようになるということを根気よく説いていかなければなりません。先生によっては漫画と絵本の区別がつかず、漫画ばかり読んで困るという方もいらっしゃいますが、本を読むことによって理解力が上がるということを知ってもらいたいと思っています。

又一人の先生だけに本の管理を負擔させてしまうと大変ですので、学校全体で本を読ませる雰囲気を作っていくことも大切です。そして日本でも図書委員がいるように子供達にも手伝わせることを教えています。子供に手伝わせると、本がなくなってしまうのではないかという意見がありましたが、実際やらせてみると、本を返さない子供の家にまでわざわざ取りに行くといったような責任感をもって、子供達は仕事をしてくれます。

こうしたノウハウをセミナーで教えていましたが、5年前からは教員学校で教えることを始めました。それをラオスの文部省が授業の正式なカリキュラムに組み入れてくれたのです。援助ということは、こちらが全てやることではなく最初ある程度を手伝い、後は現地の自発的な活動に任せるといったことが理想的だと常々感じています。こうしてラオスの政府が動いてくれたことは、私達にとって大変嬉しいことだったのです。

こうした経過を経て、子供文化センターの設立に関してもラオス政府が認め、推進してくれました。そして全国で展開してくれたのですが、これは教職員の教育をせず施設だけ整えただけであった為、こちらとしては少々自分達の見解と違った事になってしまいました。ですから私達は今後その方々に、そうした施設の運営のノウハウを教えていかななくてはならないと思っています。

ラオスの教職員達は言われないとやらない、自分から考え何かしようということをしませんでした。社会主義国で生まれて育ち、子供の頃から自分の意見を出すことが難しかった為です。それが現在国にとって非常に痛手となっています。皮肉なことに今になって、子供文化センターで若い人達が自分の意見をいうことを政府は推奨するようになりました。もっと自国民が自分で考え、自分で行動の責任をとれるような人間に成長してほしいと、ラオスの政府も変わってきたように思います。

ラオスの大学等に行ってみますと、経済格差が非常に大きいことに気が付きます。お金持ちの子供は日本で走っているような高級車に乗り、その一方で先生の給料は非常に低い為自転車に乗っています。そうすると先生は学校で知識を全部教えず、自ら開く塾にお金を払う子供を呼ぶことをします。残念ながら先生はそうしたことをしないと生活が出来ないのです。しかしこのような状態ですと、お金持ちは教育が受けられますが、そうでないと十分な教育が受けられないこととなります。

私は全ての子供に小さい時から良い教育を受けさせ、自分の意見を持てるような人間を育てていきたいと思いました。そこで1992年、自分で私立学校を設立しようと計画し、商工会議所から頂いた自国貢献に対する賞の賞金で土地を買いました。しかし、建物を建てるお金が工面できず、15年間放置しておいたのです。たまたま隣の土地が売りに出て、敷地は広い方が良くその土地を買取ったのを機会に、本格的に学校設立に取りかかりました。私の学

校ではお金持ちの子供からは沢山お金を頂きますが、お金のない子には奨学金を出しています。又、寮や畑もつくって自給自足がある程度出来るようにもしました。

学校以外の奉仕活動として、学校に行けなかった人や、少数民族、障害者等、仕事に就きたくてもなかなか就けないラオスの女性達の為に、ラオスの職業訓練センターをつくり、織物や縫製の勉強を教えています。1992年ラオスの織物を文化服装学院の近くのギャラリーで売ったところ、1週間の内に300万円売れ、その後横浜市博物館で展示会をさせて頂き、1ヶ月で1000万円売ることが出来ました。そのお金をラオスの女性の為に使おうということがこの活動の始まりです。お金はそれだけでは足りませんでした。日本政府の協力等があり、研修所、生産所、寮等を作ることが出来、現在300人以上の研修生を送り出しています。

女性の為の職業訓練センターは出来ましたが、ラオスは少数民族が多くいる為、政府のように外から画一化された教育を押しつけても難しい点があります。その村々によって言葉も考え方も違いますから、いかにしてその村々が教えられたことを自分達に合うように自ら考えていくかが大切です。その為私は研修等をする時には、村から一人ではなくグループで連れてきます。一人ですと疎外感が出てきますし、同化教育になってしまうからです。人数がいれば色々なことが吸収出来ますし、自分達の村の事を考えられるグループを作ったほうが帰ってから受け入れられ易く、自分達の村にそれを生かすことが出来ると思います。

ラオスの政府はラオスの少数民族を保護しようとはしますが、彼らにラオス語による画一化された教育しか与えない為、先生が行っても受け入れられないし、長くいることができません。そういうことがなくなるよう、村の人達が自分の村の為に何が必要か考えられるようにしていきたいと思っています。私としては小学校から大学まで作りたいという、とてつもなく大きな構想を持っています。皆さん、応援してください。